

現代中国語の漢字に潜むジェンダー

任 利

1. はじめに

現代中国語においては、特に女性と男性によって使用する言葉に差が見られないと従来から指摘されてきた。確かに、いわゆる「女性語・男性語」のように、性による言葉遣いの違いが見られないが、ジェンダーがないわけではない。ただし、言語使用実態に見られるジェンダーに対する記述的な研究は立ち遅れている。

現代中国語においては、どういったところにジェンダーが現れるのだろうか。すなわち、現代中国語に見られるジェンダーは、言葉のどの面において顕著であるかが問題となる。それは音声、文法、語彙、文体、表記……などの各面に現れる可能性があるが、その出方は必ずしも均等ではない。

本稿では、中国語の特有な文字表記形式、すなわち漢字に潜むジェンダーを考察することを目的とする。そして、その差が生じる原因は何か、中国の文化的背景がその差にどのように影響するのかなども、追求していきたい。

2. 女偏の漢字に見られるジェンダー

中国語は言語表現形式がすべて漢字である。言語表現形式としての漢字の字形、字義に実にジェンダーが見られる。

まず、挙げられるのは女偏の漢字に見られるジェンダーである。中国語の漢字には“女”偏がついたものが多いという現象がある。

中国社会科学院語言研究所詞典編輯室、即ち中国の学术界を代表する国家アカデミーの言語部門が編纂した辞書である《現代汉语词典》(第5版、2007年、商務印書館)によると、“女”を部首にもつ漢字数が207文字である。一方、同辞書には“男”偏の部首がない⁽¹⁾。調べてみると、“男”が一部に入っている漢字は“甥”、“舅”という2文字しかない。また、“女”と“男”両方

が入っている漢字は“𡥉”という1文字がある。

“女”を部首にもつ漢字の中には、以下のように女性の親族を指すものが多い。例えば、

“奶”（父方の祖母）、“姥”（母方の祖母）、“婆”（しゅうとめ）、“妈”（母）、“姑”（父の姉妹）、“姨”（母の姉妹）、“娘”（母）、“姉”（父の弟の妻）、“姪”（母の兄弟の妻）、“嫂”（兄嫁）、“姐”（姉）、“姊”（姉）、“媳”（嫁）、“妹”（妹）など⁽²⁾。ただし、“婿”（娘婿）が例外で、男性の親族を表す。

しかし、留意しなければならないのは、女偏の漢字の中には以下のように、マイナスで否定的な含意をもつ漢字が非常に多いということである。例えば、

“妄”（でたらめ）、“奸”（ずるい）、“妖”（あやしい）、“嫉”（ねたむ）、“妒”（そねむ）、“媚”（やきもちをやく）、“媚”（こびる）、“嫌”（いやがる）、“威”（おびやかす）、“耍”（もてあそぶ）、“菱”（おとろえる）、“姪”（頑固）、“婪”（むさぼる）、“妨”（邪魔する）、“怒”（怒る）、“奴”（奴隷）など。

上記の「でたらめ」、「ずるい」、「あやしい」、「ねたむ」、「そねむ」、「やきもちをやく」、「こびる」、「いやがる」、「おびやかす」、「もてあそぶ」、「おとろえる」、「頑固」、「むさぼる」、「邪魔する」、「怒る」、「奴隷」などのようなマイナスで否定的な意味は、いずれその語意の主体は男女を問わない。すなわち、女性に限っているわけではない。なぜ“女”偏でなければならないのであろう。

また、女性を軽蔑する漢字や売春婦を指す漢字が多い。例えば、“婢”（下女）、“妾”（めかけ）、“嫖”（女郎買い）、“妓”（遊女）、“娼”（売春婦）、“婬”（売女）、“姘”（配偶者以外の異性と性行為をする）など。確かに、売春婦を指す漢字“妓”、“娼”、“婬”などは女性と関係がないとはいえないが、“嫖”は行為の主体は男性である。“姘”は女性に限ったことはない。なぜ“女”偏でなければならないのであろう。

一方、“女”と“男”両方が入っている漢字“𡥉”（なぶる）は、その構造から見て女性が二人の男性に囲まれ、しつこくつきまとわれている様子が読める。『漢字源』（学研）によると、“𡥉”の《解字》は「会意、「男+女+男」で、男が女につきまとうこと」とされている。《現代汉语词典》では、「①戏

弄（からかう）②纠缠（つきまとう）」と解釈している。“𡇗”は女性を軽蔑する漢字の部類に入るものであろう⁽³⁾。

このように、女性を性の対象としてみる漢字は非常に多いのに比べて、男性に対しては、ほとんど見られない。“男”が一部に入っている漢字は“甥”、“舅”という2文字しかない。二文字とも男性の親族をさすものである。

一方、中国語では男性を指す場合、“汉”（男），“夫”（成人の男）という漢字を使う。両方とも「立派な男」、「一人前の男」という意味であるため、否定的含意をもつものではなく、むしろプラス評価のものである。また、「弱い、だらしなない男性」、「男らしさが不十分な男性」をさす語でさえ、以下のように“汉”、“夫”の漢字が入っている。例えば、“懒汉”（怠け者），“醉汉”（酔漢），“无赖汉”（無頼な男），“恶汉”（悪事をする男），“懦夫”（臆病な男），“病夫”（病弱な男）など。

中国語の特有な文字表記形式、すなわち漢字には、実は中国の社会・文化の通念がよく表われている。「女」が部首とされるのに、「男」が部首とされないということには、差別される対象として「女」部首が設けられた、という背景があると指摘されている⁽⁴⁾。

まず、“女”という字から見てみよう。『漢字源』（学研）によると、“女”の《解字》は「象形。なよなよとしたからだつきの女性を描いたもの」とされている。確かに、文字全体がなよやかな曲線で描かれているのは女性の身体のしなやかさを強調している。その他、“女”という文字は、手を前に組みあわせてひざまずいた人間の形をかたどった象形文字とされている⁽⁵⁾。しかし、なぜ手を前に組みあわせ、ひざまずいた人間が女性なのか、それはやはり、この字の元の形とされる女性の姿は、女性が男性に隷属させられていた時代の「男尊女卑」的思想の反映であろう。すなわち、女は男の前でひざまずき、いわれるままに行動することが要求された時代に作られた漢字なのであろう。“女”という漢字の背景には、女が男より一段低い地位をあたえられていた事実が存在する⁽⁶⁾。

このような意味で、女偏の漢字に現れるジェンダーは古くから続いてきた男性中心の社会である中国社会の実態を反映しているものなのであろう。女

偏の漢字の中では、最初は女性と関係がないこともなかったが、現在では既に原意から離れ、男女いずれの性別とも関係が無くなっているものが多い。特に、上記述べた“媚”（こびる）、“嫌”（いやがる）、“威”（脅かす）、“耍”（もてあそぶ）など、マイナスで否定的意味の強い漢字には“女”偏がついたものが多い。このような漢字を日常目にしたり、日常に使ったりすることで、その字のマイナスのイメージが女性と直接的に結びつくようになり、知らないうちに女性そのものに対するマイナスイメージが人々の意識内に刷り込まれ、女性への蔑視思想、女性差別が無意識のうちに人々の意識の中に植え付けられるのが避けられないと思われる。

3. “女” “男” 以外の漢字に見られるジェンダー

現代中国語においては、性別をさす“女” “男” 以外の漢字にもジェンダーが見られる。それは何らかの類推・比喩・共通性によって“男” ⇔ “女” の対立と同じようにジェンダーを表すようになる。例えば、以下の漢字の対立である。“阳”（陽）⇔ “阴”（陰）、“乾” ⇔ “坤”、“龙”（龍）⇔ “凤”（鳳）、“鸳”（鴛）⇔ “鸯”（鴦）

まず、“阳” ⇔ “阴” という漢字の対立である。“阳” ⇔ “阴” は、昔の中国の哲学である易学では、宇宙や人間社会を貫く二大対立である。“阳” が活発的で飛び出しているものを表し、反対に“阴” は閉じこもってへこんでいるのを表す、という使い分けがあるから、男は“阳” で、女は“阴” とする。以下の複合語を見れば分かる。

例えば、“阳性”（男性の）⇔ “阴性”（女性の）、“阳物”（男性の生殖器）⇔ “阴物”（女性の生殖器）、“壮阳”（男性の精力をつける）⇔ “滋阴”（女性の栄養を補給する）、“阴阳人”（男女両性を備えている人）。

“阳” ⇔ “阴” はペアとして使う場合は、男は“阳” で、女は“阴” とするが、“阴茎”（ペニス）“阴囊”（陰囊）以外に“阴” はほとんど女性を指す。一方、“阳” はもっぱら男性の性器を指す。例えば、“阳痿”（インポテンツ）“阳根”（男根）など。

次に、“乾” ⇔ “坤” という漢字の対立である。“乾” も“坤” も易学の八

卦の名である。易学では、“乾”“坤”の対立が天地・陰陽・男女を象徴する。そのゆえ、“乾”は男性を、“坤”は女性を表している。以下の複合語を見ればそのジェンダーの対立が分かる。例えば、“乾宅”（花婿の実家）⇔“坤宅”（花嫁の実家）、“乾造”（花婿）⇔“坤造”（花嫁）。

特に、“坤”は女性を明示するマークとなり、以下のような複合語が「女性用・婦人用のもの」を指す。例えば、“坤包”（婦人用鞆或いは婦人用財布）、“坤表”（婦人用腕時計）、“坤车”（婦人用自転車）、“坤鞋”（婦人用靴）、“坤角儿”（女優）。一方、“乾”は男性を明示するマークであるが、「男性用・紳士用のもの」を指す複合語は見られない。

その他、“龙”⇔“凤”という漢字の対立も男女を象徴する。例えば、“龙凤帖”（結婚する男女双方の生年月日時刻と易者の判断文などが記された婚約書。男性側は“龙”、女性側は“凤”である。）、“凤冠”（昔、嫁入りの時に嫁がつける鳳凰の形の冠。）、“凤眼”（女性の切れ長ですっきりした目。）また、“鸳”⇔“鸯”という漢字の対立も男女を象徴する。“鸳鸯”（夫婦にたとえることが多い。）、“鸳鸯旅馆”（ラブホテル）、“鸳鸯浴”（男女混浴）、“棒打鸳鸯”（男女の仲を邪魔する）。

4. 男女の名前の漢字使用に見られるジェンダー

中国では普通フルネームで人を呼ぶので、姓と名の字形、字義のバランスに留意して名前をつけることが多い。中国人の男性と女性の名前に使われる漢字には一定の使用傾向が見られる。それは漢字の字形、字義に潜んでいるイメージを使うからと思う。

中国人男性の名前には、以下のような漢字が多く使われる。例えば、“伟”（偉）、“雄”、“魁”、“刚”（剛）、“武”、“锋”（鋒）、“岭”、“虎”（虎）、“龙”（龍）、“博”、“壮”、“奎”、“雷”、“健”、“勇”、“烈”、“斌”、“兵”、“军”（軍）、“力”、“强”（強）、“杰”（傑）など、いずれも雄大・強靱のイメージの漢字である。

一方、中国人女性の名前には、以下のように、草冠、王偏、女偏の漢字や花鳥風月に関する漢字が多い。例えば、“芸”、“莉”、“蕊”（蕊）、“花”、“英”、

“蕾”、“玉”、“玲”、“珠”、“婷”、“婉”、“娟”、“娜”、“燕”、“凤”（鳳）、“巧”、“慧”（恵）、“霞”、“月”、“云”（雲）、“艳”（艷）、“美”、“雪”、“爱”（愛）、“丽”（麗）など、いずれも美しい、優しいイメージの漢字である。

男女の名前にそれぞれ違うイメージの漢字を使用することから、中国の社会が男女の役割にどう期待してきたかがよく分かる。つまり、男性には「たくましさ・勇ましさ」、女性には「美しさ・優しさ」を求めている。

そういう傾向はまた外国人の名前にまで及んでしまう。中国では外国人、特に欧米諸国の人名にはその音に当てる漢字を使う。外国人男性の名前には、中国人男性の名前と同様、雄大・強靱のイメージの漢字が用いられる。例えば、亚伯拉罕 (Abraham)、贝克汉姆 (Beckham)、大卫 (David)、戈尔巴乔夫 (Gorbachev)、汉斯 (Hans)、汉姆雷特 (Hamlet)、麦德维杰夫 (Medvedev)、迈克 (Mike)、穆沙拉夫 (Musharraf)、奥巴马 (Obama)、史蒂夫 (Steven)、伍尔夫 (Woolf) など、特に“汉”、“夫”など「立派な男・一人前の男」を指す漢字が多く使用される。

一方、外国人女性の名前には、中国人女性の名前と同様、美しい・優しいイメージの漢字が用いられる。例えば、爱丽丝 (Alice)、安娜 (Anna)、贝蒂 (Betty)、爱蜜莉 (Emily)、爱玛 (Emma)、伊丽莎白 (Elizabeth)、琳达 (Linda)、诺娜 (Nona)、玛丽 (Mary)、梅尔娃 (Melva)、威莉 (Willie)、威尔玛 (Wilma) など。

その他、中国では古くから“五行相生之理”による行列というものがある。名前をつける時に、兄弟、いとこ、またいとこは皆一字を共有することになっている。例えば、“李尚春、李尚秋、李尚冬”など。しかし、女性はこれに準えず、族譜にも記載してもらえない。女系として婿の名前が載るだけである。これは古くから女性蔑視思想があったからであろう。

5. “男女”という語順に見られるジェンダー

現代中国語の常用語句の語順の決め方にジェンダーが見られる。それは必ず“男女”という順序であり、“女男”という順序ではないという現象である。

例えば、“男女平等”、“男女双方”、“男女同校”、“男女老少”、“男女服装”、

“男女搭配”（男女の組み合わせ）、“男女两用”（男女ともに使えるもの）、“男女混双”（男女混合ダブルス）、“男女同工同酬”などのように、すべて一様で、“男女”の順である⁽⁷⁾。

同じく、男女を一緒に言及する時にも、好まれる順序がある。

例えば、“男婚女嫁”（男性も女性も適齢になれば結婚すべきである）、“男扮女装”（男性が女装する）、“男盗女娼”（男はどろぼう、女は遊女）、“男尊女卑”（男性を尊び、女性を卑しいとする態度・思想）、“男左女右”（男性は左、女性は右。手相を見ると、写真を撮るときや座席の位置などについていう）、“男男女女”（男女が入り混じった大勢の人）、“一男一女”（男一人、女一人）、“有男有女”（男も女もいる）、“不男不女”（服装や髪型などが男か女か分からない）、“一男半女”（一人か二人の数少ない子供）、“半男半女”（中性的）、“善男信女”（善男善女）、“红男绿女”（思い思いに着飾った青年男女）など。

また、“夫妇”（夫婦）、“夫妻”、“老公老婆”（夫と妻）、“父母”、“公婆”（しゅうととしゅうとめ）、“儿女”（息子と娘、或いは若い男女）、“兄弟姐妹”（兄弟姉妹）、“新郎新娘”（新郎新婦）など、すなわち、必ず男性が先に、女性が後に言及される。

このような順序の語彙はいくらでもあげることができる。ただし、外国語“Ladies and Gentlemen”の訳語にあたる“女士们和先生们”というのは例外である。

ここでは注意しなければならないのは、“男女”の語順があまりに慣習化されたために、中国では男女平等意識の強い人々の間でもこのような使い慣れた言葉の語順に疑問すら抱かないことが多いことである。もはやその存在にすら気がつかずにいるということである。このような順序を見れば、現代中国社会では男女の地位や役割がそれぞれどう考えられているかが分かる。“男女”の語順などのような慣習化された言語習慣は、三千年封建社会の歴史が続いてきた中国において“男尊女卑”という固定的観念が無意識的に、しかも根深く言語に浸透してきた結果、現在まで続いていると思われる。

6. 今後の課題—結語にかえて—

以上、現代中国語の漢字に潜むジェンダーを考察した。表面的にはあまり性差が存在しないと考えられた中国語においても、漢字の使用には明らかに性差が存在し、それが古くから続いてきた男性中心の中国社会における言語的性差別につながると言える。今後、言語使用実態の現状記述のみならず、なぜそうなのかというところまで解釈をつける分析が必要であると思う。特に、中国独自の文化的背景が漢字におけるジェンダーにどのように影響するのかを追求していく必要があると思われる。

次に、具体的な課題をあげて結語にかえる。例えば、中国語の漢字には“女”偏の部首がある一方、“男”偏の部首がない。それは「男」を指す場合、“人”偏で表すのではないかと思う。そういう意味で、英語のman、フランス語のhomme、ドイツ語のMannが「男」を意味すると同時に、「人」を意味するという共通するところがある。今後言語類型論という観点から、中国語の漢字に潜むジェンダーについて考えていきたい。

また、同じ漢字を使う日本語には女偏の漢字がたくさん使われている。日本語における女偏の漢字について、言語学の視点ではなく、男女の性差別、性暴力などの視点から考察した川田(2000)などの論考が挙げられる。今後、「漢字」という文字に見られるジェンダーを始め、日本語と中国語両言語におけるジェンダーの問題について比較対照する研究も必要であると思われる。

注

- (1) 阿辻 (2004:22) によると、中国最古の部首別字書とされる『说文解字』(後漢の許慎撰。紀元 100 年頃完成) には“男”部があり、“舅”と“甥”の二字が収められていたが、のちの字書では部ごと淘汰されてしまった。
- (2) 以上括弧の中の意味は《現代汉语词典》による。
- (3) 阿辻 (1994:92) によると、“鬻”という漢字は『文選』(梁の昭明太子編、530 年頃成書) の「山巨源に与えて交わりを絶つ書」(『文選』巻四十三所収) には出た。古代の文献で既に「愚弄する・もてあそぶ」、あるいは「うるさくつきまとう」という意味で使われていた。

- (4) 阿辻 (2004:25) を参照。
- (5) 阿辻 (1994:104) を参照。
- (6) 阿辻 (1994:104)、阿辻 (2004:23) を参照。
- (7) 上記の用例は中国語母語話者の内省によるものである。

参考文献

- 阿辻哲次 (1994) 『漢字の字源』 講談社
- 阿辻哲次 (2004) 『部首のはなし』 中公新書
- 井出祥子編 (1997) 『女性語の世界』 明治書院
- 角川書店編 (1996) 『女偏の漢字』 角川書店
- 川田文子 (2000) 『女という文字、おんなということば』 明石書店
- 小矢野哲夫 (2004) 「暮らしの中にひそむ日本語とジェンダー」 『日本語学』 23-7 pp. 56-62
明治書院
- 坪井美樹 (2003) 「男手・女手—「性差」による表記様式の分類」 『筑波日本語研究』 8
筑波大学日本語学研究室
- 中村桃子 (2001) 『言葉とジェンダー』 勁草書房
- 任 利 (2005) 「言語研究における《女性性・男性性》という概念について—現代日本語の
言語使用実態に基づく概念規定の試み」 『ことば』 26号 pp. 96-105 現代日
本語研究会
- 李 奇楠 (2007) 「中国語における女性差別的表現」 『ことば』 28号 pp. 68-80 現代日本語
研究会
- 劉 素英 (1997) 「中国語」 井出祥子編 『女性語の世界』 pp. 156-161 明治書院
- (にん り・茨城キリスト教大学)